
月灯り

もっこす

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月灯り

【Nコード】

N1217D

【作者名】

もっこす

【あらすじ】

心の病をどうにかしたいとあがき、いろいろおかしな治療方法を試した一人の人間のエッセイ。

「あれっ!？」おかしいな、高校の同級生7、8人で何気ない雑談をしていた時、私だけ作り笑いも心からの笑いも起きなかった。でも少なくとも顔は笑ったつもりだった。

笑ったつもりの顔は他人は決して指摘しない。

でも私には恐ろしい感覚で伝わってきた。

そう、強ばるような引きつるようなそんな顔をしているだろう事は自分自身が一番感じていた。自分自身の表情、そんな事を意識した事などなかった。でも今は話しの内容などどうでもよかった。自分の顔が、表情が、感情に関係なく硬く強ばる事しか出来ないのだ。その時から自分に起きる全ての事象に苦しみもがき続ける事になったのだ。

その日から一日がとても長く、自分の存在を否定するばかりだった。特に人との関わりの中で。

未来の夢どころではない、その日いちにちを生きていくのが精一杯でいつも張り詰めていた。全てを恐れていた。人に気を遣うどころか、そんな余裕などひとかけらもなく他者と対峙する時はまさに決闘しているかのごとく自分自身の表情ばかりに気持ちがいってしまふのだ。そんな状態で会話も楽しいはずはなく、人と話す事は大仕事で恐怖ばかりであった。幼稚園生でも出来る

「笑顔で挨拶」が出来ず、さあ笑顔だぞと言いつつも聞かせても顔は言う事を聞いてくれず強ばってしまう。そしてその瞬間のショックはとても激しくちょうど胸と胸の間のあたりにぐつと何かが突き刺さるのだった。一度そんな目にあった他人は次からは必ず私に気を遣っているのが分かる。ショックな気持ちと申し訳ない気持ちでだんだんと人に関わるのが辛いだけになってしまうのだ。せつかくの青春時代をハムスターの回し車の中にいるかのようにグルグルと回っていた。ゴールなどないのに、いや自分で回していることすら気づかず

に

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1217d/>

月灯り

2010年10月11日00時37分発行